

書名：新書 365 冊

著者：宮崎哲弥

出版社：朝日新聞社

出版年月：2006年10月

総ページ数：360ページ

ISBN：4022731060



推薦者

伊藤直之

鳴門教育大学大学院准教授

社会系コース

そもそも、他人の“お勧め”など、鵜呑みにすべきではなく、少しは疑ってみるべきである。

推薦図書紹介にこんなことを書いては元も子もないわけであるが、それでも、なぜ私がこの本をお勧めのかと言えば、筆者の言うように、「新書は社会科学や自然科学の専門知を、大衆に広めるという意味で「日本型啓蒙」の中核を担うメディア(p.4)」だと思われるからである。

さて、この本は、毎日のようにテレビで見かける評論家・宮崎哲弥氏が、おそらく2002～2006年にかけて出版された新書のうちのいくつかを読破したうえで、それらを「Best」「Better」「Worst」に分けて評価した、いわば新書についてのミシュラン本である。宮崎氏の評論活動は多岐にわたるために、某テレビ番組では“なんでも評論家”の肩書きが充てられているが、その評論活動の源泉は幅広いジャンルの新書読みにあるのかもしれない。

もし、あなたが自分自身の専門としない科学知を、新書を通して速やかに得たいと思うのであれば、この本は有益なガイドになるかもしれない。我が国で毎月のように発行され、蓄積される新書のなかから、門外漢はどれを手にしたらよいか分からないわけだから。

しかし、評価というものは、その人の価値観（いかなるものに価値を認めるかについての判断規準）に強く左右されるということ意識しておくべきである。ファーストフードで十分だと思っている人がミシュラン本を手にしても、それから得られるものは少ないだろう。でも、もしかしたら、それをきっかけにして、判断規準が揺さぶられるかもしれない。

学生の皆さんには、あえて宮崎氏が「Best」または「Worst」と評価し、長々と賞賛ないし批判のコメントを寄せている新書こそを手にとっていただき、あなた自身の読後感と氏のコメントを比較考察することをお勧めしたい。氏に“同感”と思うときよりも、氏の評価が“納得しがたい”と思うときにこそ、読み甲斐があるのではないか。

